

平成22年度 【大学振興会研究奨励補助】研究成果報告書

学部名 看護学部

フリガナ イノ キョウコ
氏名 井野 恭子

研究期間 平成22年度

研究課題名 日本におけるフィリピン人看護師導入に伴う文化的課題の検討

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	井野 恭子	看護学部	講師
研究分担者			
研究分担者			

1. 本研究開始の背景や目的等

日本は、経済連携協定（Economic Partnership Agreement：以下 EPA と略す）の締結により、2009年にフィリピン人看護師・介護福祉士候補生が来日した。このことは、これまで外国人の導入を拒んできた日本にとって、大きな転換点と言えるものである。実際、愛知県には3病院合計14名のフィリピン人看護師候補生が配属されている。このような現状を踏まえ、実際に日本に導入されたフィリピン人看護師候補生および受け入れ施設の管理者の人たちが遭遇している現状を明らかにし、文化の視座からの課題を検討した。

2. 研究方法等

研究方法は以下のとおりである。1. 対象：東海地域のフィリピン人看護師候補生を受け入れている2病院の教育担当管理者3名およびフィリピン人看護師候補生3名。2. 調査期間：平成22年10月～平成23年1月 3. 調査内容および分析方法：管理者および候補生それぞれへのインタビューガイドに沿って、半構造的インタビューを行った。得られたデータは文化に関連する事柄を抽出し、質的分析を行った。4. 倫理的配慮：椋山女学園大学看護学部研究倫理審査委員会の承認（No.8）を受け、研究協力の任意性と匿名性、協力の撤回の自由、および結果の公表について文書で説明し、同意書への署名を基に同意の確認を行った。

3. 研究成果の概要

調査の結果、以下のことが明らかとなった。

1. フィリピンと日本では、看護業務の規定が異なっている。フィリピンの看護師業務は診療上の補助業務が主体であり、日常生活援助は家族が担う役割である。そのため、日本で看護師候補生として日常生活援助として清拭やオムツ交換などの業務に従事する中、母国で培ってきた看護師の自尊感情が損なわれ、看護師としてのアイデンティティが揺らぐ経験をしている。現状はフィリピン人の努力によって対処しているが、全てのフィリピン人看護師候補生に共通の問題であるため、組織的な対応を検討する必要がある。
2. 受け入れ病院は、看護師候補生が日本の生活に慣れるように、住居関連を含む全ての準備を整えている。しかし、フィリピン人は自分たちのコミュニティで結束し、他国の人との連携・協働が希薄になるケースも出現している。また、フィリピン人は外貨稼ぎを目的として来日しているケースも多く、日本社会へ適応しようとする意欲が低い人も見られる。EPA では、インドネシア人も導入され、今後、さらに他国へも拡大される可能性がある。このような現状の中、フィリピン人は日本人のみならず、他国の人との協調関係の確立も求められ、その方略の確立が必要と考える。
3. 外国人が日本に来日する中で、語学に関するコミュニケーションの問題は大きい。特に看護師国家試験の受験が日本語でなされるため、受け入れ施設は勤務時間内に学習時間を設定し、支援活動を行っている。また、本人たちの自助努力もあり、病院配属後 6 カ月くらいで日本の医療活動に適応している。しかし一方、フィリピン人は言語的コミュニケーションが不慣れなことを活用して人間関係の調整を図っている側面も明らかとなった。これは職場内で不本意なことを言われた場合に、言われた意味がわからない振りをして対処しているというものである。このような対処行動を必要とする理由は、受け入れ病院の全ての職員が統一された理解に至っていないことが考えられる。今後、受け入れへの更なる努力が求められる。

4. キーワード

①フィリピン人看護師候補生	②EPA	③文化	④協働
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望（公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著者名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。）

今回の調査により、フィリピン人看護師候補生たちが日本の医療現場の中で総合している実態の 1 部を把握することができた。多くの看護師候補生は、母国との看護業務の相違に戸惑いながらも、日本の医療現場に適応しようと日々努力している。また、外国人看護師候補生を受け入れている病院が果たしている役割は大きく、各々の施設の努力によってこの制度が成立していると考えられる。

この結果は、今後、文化看護学会にて学会発表するとともに、平成 23 年度の本学部の紀要へ投稿し、公表する予定である。さらに、今回得られた結果を基に、さらに外国人看護師との協働プログラムの開発に取り組む予定である。